

ひっ
何のつもり!
離しなさい!

ティファは、どこかの施設に連れて行かれた。そこにはすでに多数の神羅兵とモンスターが待ち構えていた。『いや、ティファちゃんにはいつも世話になってるからなあ。神羅下級兵の性処理係になってもらおうと思っただけな!』

『おっ、ガキがどうなってもいいのか?』
『クッ……マリン……』

ティファの豊満な肉体にモルホルの触手が絡みつき、容赦なく締め付ける。『グッ……ウウッ……』
ティファが声を上げるのを、笑いながら眺める神羅兵たち。『ここはさながら狂乱の宴の間だった。』

『イヤッ! 離して! 離しなさい!』

彼女の、戦士としてはあまりに貧弱で扇情的な薄い装束はあつと、いっ間に剥がされた。ティファの頬が紅潮する。彼女が息をつく間もなく、モルホルの太々とした触手がグチュグチュと音を立てながら彼女の膣内にぬめり込んだ。

くっ
ひっ卑怯よ!

先にマリリンを
解放しなさい!
ウッ
アアアア

「ヒィッ!
痺れ……る……」
アアアッ!
ティファのあえぎ混じりの
悲鳴が響くと、神羅兵たちは
手を叩いて喜び、色めきたった。

ジュポ

ネチ…

ジュポ

ネチ…

強気な態度とは裏腹に
ティファの淫乱な肉体は 徐々に
しかし確実に絶頂へと導かれていた
神羅兵の嫌らしい笑い声と
汚らわしい魔物の触手によって……

やあっ

「ティファちゃん、闘わないとこのままモンスターのイカサレちまうぜ！ 神羅兵の野次が飛ぶ。ゲハハハハ！」
しかしティファの身体は、特殊な粘液によって痺れ、言うことを聞かない。
「アアッ！ ビッ！ そんな奥……」

ブルンッ
ブルンッ

「アアアアッ！ 嫌アアアアアイヤ あっ あっ あっ やめてえ！ 膣内出しだけはやめてえ！ ああああああッ！」
触手に押さえこまれたティファの身体が激しい快感にビクビクリと痙攣した

くっ… ああッ！
やめなさい！
みっ見ないでえ！
見ないでえ！

ズッポッ
ズッポッ

ズッポッ

「ヒァアアアアアッ
魔物汁が……いっぱいっ
お腹の中に……出てるッ
ひあああああッ」

嫌アアアアアッ
ああはあッ

粘液まみれの膣内が激しくビクつき
触手を飲み込んで放さないのだった。

モルホルの粘液がティファの
膣内と外にたっぷり注がれた。

ドクッ
ドクッ

ドクッ

ネキ...

ネキ...



「じッ なっ 何!!
何をすつつもりなの!!」
「モルホルの触手がティファの胸に
絡みつき、卑猥にうねっている」
「いや、ああ、やめてえ……」

「ああ……
触手は いやあ……」

「ティファの柔らかく、張りのある
白い乳房を、モルホルの触手が
ネチネチと這いずり回る」
「取り巻いて見ていた神羅兵にも
その柔らかさと弾力が伝わった」



「キヤッ! ま また
粘液が...ウ...クッ」
まるでパイスリのように
ニチャニチャと卑猥な音を立てながら
触手が乳房に絡み、スボスボと動く。

やめてーやめてえ!
嫌あああ

グジュッ

「アア...っ! だっ だめっ
そんなに揉まないで! ふああ
乳首コリコリしないでえ! やめてえ!
（いっっ嫌う 恥ずかしい!）
私、触手にいやらしくおっばい触られて
感じませられてるなんて...」

ヌク
ヌク

「あっ ああああああ
嫌あ 動かさないでっ
（だめだめよあ！）
私胸弱いの……」
ティファのそんな気持ち
見透かすように、触手の動きは
激しくなった。

いやアッ
あっぱいだめえ
そんなに動かしちゃ

ヌギユ

「ティファちゃん、息が
ハアハアしてるよあ、ど
ケラケラ、神羅兵たちが笑
（……）
感じ……この痺れ粘液のせいで
私じゃ……この痺れ粘液のせいで
こんな恥辱、認めない！私
強くさう思えば思うほど、快
巻き込まれてゆくティファ
がそこだった。

ヌギユ
ヌギユ

やっ
ヌルヌルして
気持ち……悪い？

ヌギユ
ヌギユ



グチュッ
グチュッ
グチュッ

「アアッ あはあつ はああつ!!」
ティファの甘い吐息には、徐々に艶っぽい
声か混じり始めた。押さえきれない屈辱と
快楽に、涙がこぼれた。私
「う……あ、このままじゃ
むっ……胸……あつばいだけで
イカサれちゃう!! 駄目、そんなの絶対嫌
憎たらしい神羅兵たちの目の前で
そんな屈辱を味わうなら、死んでしま
うがマシだわ……」

アアッ
アアッ
アアッ
アアッ
アアッ
アアッ

グチュッ
グチュッ
グチュッ

「アアッだめっ
イッアアッちゃう!!
おっばいだけでイカされる!
神羅兵の前で魔物の触手に
イカされるっ!!」



「うあああああつ ハアアアアアッ!」
魔物サ、メン出てるラー! アッアアアアッ!
「おお、ティファちゃんがいッたぜ!」
「おっぱいだけでイカサれるなんて
とんでもない淫乱だなあ! ゲハハハハハ!」
ドロドロと魔物の精子がティファの身体を
犯していく。
理性を持たぬ魔物にとつては、ティファの全身が
陵辱すべき生殖器なのであった。

ヒッ
ゲッ! アアアアッ
アアアアッ!

嫌っ
ふああああッ!
アアアアッ

グビュッ

グビュッ

ティファは屈辱にまみれながら、何人もの前で触手にイカされた。だが、観衆は誰もそれだけで満足しなかった。触手が再び激しく彼女に絡みつくと、ティファは恥ずかしがるかのように身じろぎした。

ヌチュ
ヌチュ

ガポッ

ヌチュ

ネキ...

ズム

ティファは少ない衣服を全て剥がれた。その白く豊かな肉体に、一気に触手が絡みつくと、嫌ああもう許してお願い...ひいっあッ!と、ひよきわたくアスクな触手が、ティファのアナルをちろちろと撫で回している。

ガポッ

ヌル

ネキ...

「嫌あ、そこはやめて! お尻はだめえっ」

「おしり... ああああっ」

「まだ濡れてもいないアナルに、ためらいもなく触手が突き立てられる。」

「口にも触手が進入した。穴という穴を魔物に塞がれ、ティファは声にならぬ声では抗った。しかしその声には、確かに媚びが含まれていた。」

や...んぐらっ

ネキ...

まるで触手自身も、この陵辱シヨールを愉しんでいるかのようだった。ぬらぬらと粘液を吐き出し、卑猥な音を立てながらティファをなぶった。先ほどイカされたばかりの彼女の膣内は触手の進入を悦ぶかのようにヒクヒクと肉ヒダをうごめかせている。

やはり極太の触手はきついのだろう。ティファのアナルはかなりの締め付けだ。しかしそれをものともせず、触手は彼女の肛門を犯した。膣だけの時とは明らかに違う声で彼女はあえいだ。

ヌチュ
ガッポッ

ヌチュ

ユサ
ユサ

ネキ...

ネキ...

ヌチュ

ヌル

ヌチュッ

ユサ
ユサ

フワフワ
ふわっ
んんん

(アソコだけじゃなくてお尻まで...魔物に...っく、悔しい) こんなの、悔しい...ッ! そんな思いに反し、ティファの腰は触手のうごめきに合わせでなまめかしく動いていた。

ネキ...

ヌキ

ヌキ

ユサ
ユサ

ヌキ

ヌル

ヌキ
ヌキ

ネキ...

グジュッ

ネキ...

ヌキ

ユサ
ユサ

ムラムラ
嫌
い
んぐ
つ
ふぐ
つ
ヒゲ

何...この感覚...ッ!
おっ...奥にズズズ来てる
触手がごりごり来てる...!
当たってるう子宮口にも
（あああ...膣内でごりごり

「あっ...そんなに奥う...かき回されたら私...ソグッ! ああ...うぐっ!」
膣とアナルを同時に激しく責め立てる。
ただでさえ狭い内壁で、壁ごしに触手がごりごりとあたっている。



又ル又ル、ゲチユゲチユ、
一本一本がティファを犯すラと
意思を持ってうごめいてる。
(そんなっ あっばいとあまんご
同時に責めるなんてう
卑怯よっ！)

ズル
ズル

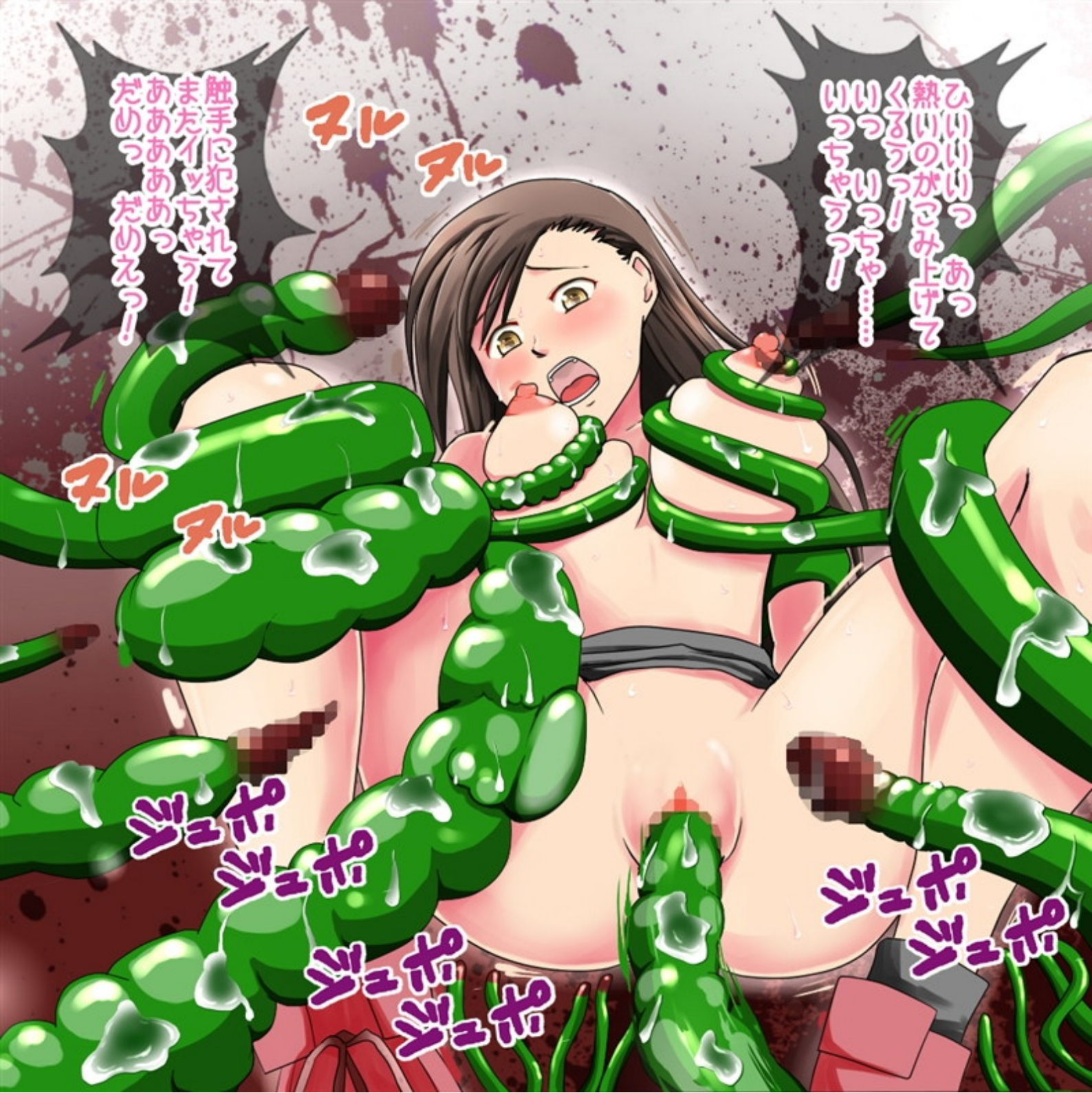
ハグッ ハグッ
イヤッ ばがりなのにな
さんなに激しくしちゃ
だっダメえっ！

ネキ...
ネキ...

ズル
ズル

ヒッヒッ
はあはあ
あっはっ
あっはっ

ズル
ズル



みいっ
熱いのがこみ上げて
くっくっ!
いっちやうっ!
いっちやうっ!

ズル
ズル

勝手に犯されて
またイッちゃう!
あああ
だめっ
だめえっ!

ズル
ズル

ズル
ズル
ズル
ズル

ズル
ズル

ひっ ああああ
ひぐううう!!
精子がっ 子宮内に!
また注がれるる

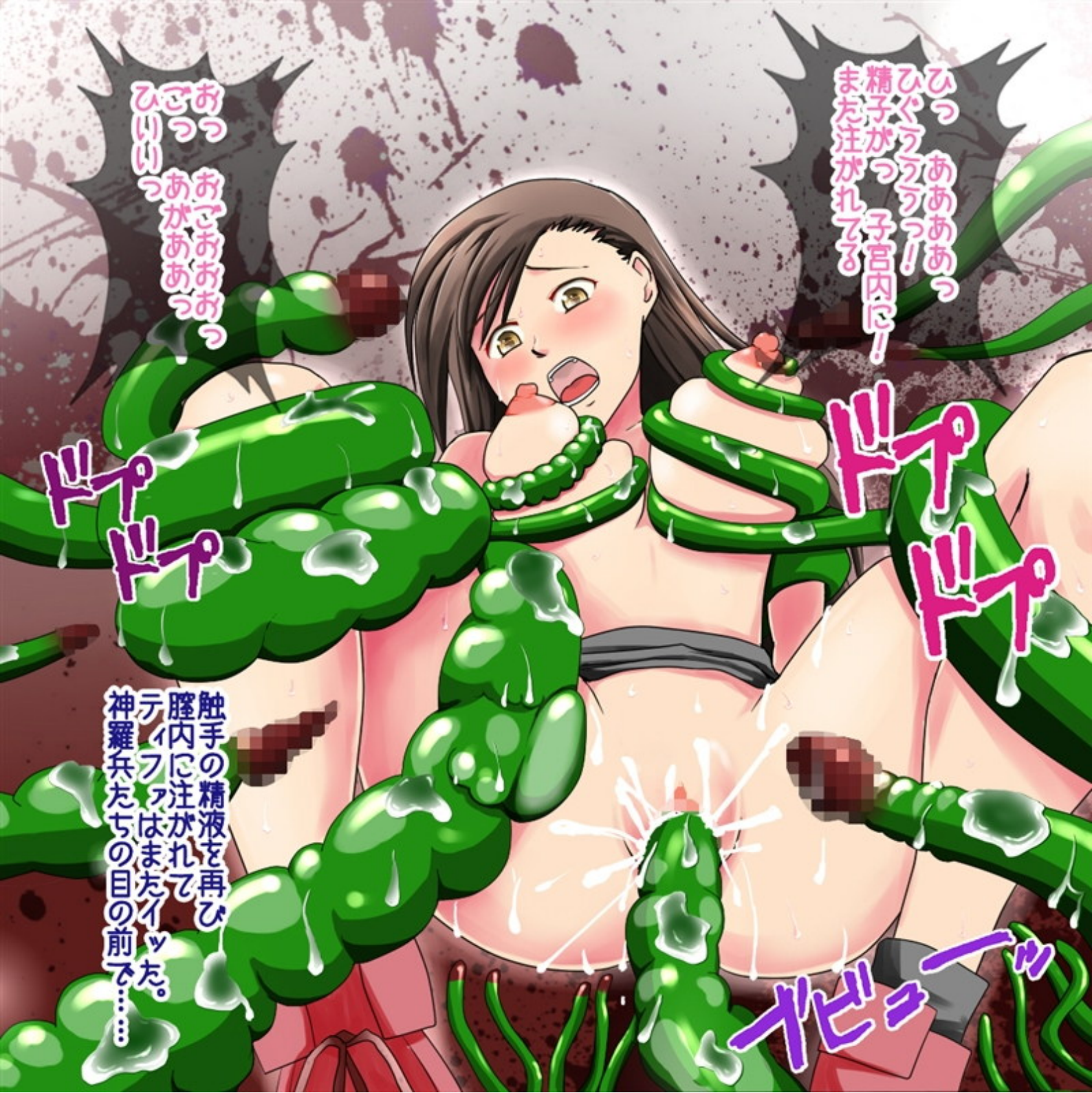
あっ おおああ
あがああ
ひいっ

ドッ
ドッ

ドッ
ドッ

触手の精液を再び
膈内に注がれて
テイクはまたイッた。
神羅兵たちの目の前で……

イビューッ



観衆の数名が、たまらず、触手に犯されるティファに
むしやぶりついた。
「ティファちゃん、お手手がお留守じゃなりが〜」

ク、ク、ク

ク、ク

「ティファちゃんのおまんこが
触手に犯されてるの丸見えだよ〜」
ほらみんな見てるせ」
（こ、こんな姿、もしクラウド
たちに見られたら私……ッ）」

ム、ム

ブル、

く……ん、ん、ん

パイア…





アアアッ

クハッ
クハッ

クハッ
クハッ

ユサ
ユサ

クハッ
クハッ

ムッ

ユサ
ユサ

揺らさないでえ！
ヒイッ

ブルン

ズウ
ズウ

ヒイッ

ドビュ〜

ドビュ〜

「ドビュ〜勢い良く精液が放たれた。
「ああっ 熱い精子たくさん
お顔に出てるッッ
はあっ アアッ」

おまんこにも
魔物セーしが
たくさん出てるよお
嫌あっ……

「淫乱ティファちゃんは
そろそろチンポが欲しくなって
きたんじやないのか？「ハハハ」
ティファは内心を見透かされ、ぎくりと
肩を震わせた。
「せんな……あの神羅兵のおちんぼを
欲しがってるんで、私の身体……
どうなっちゃうたの……」

ドッ…ッ

小太りの、気味の悪い神羅兵が、
ソリ立つ陰茎を見せつけながらティファに歩み寄った。

「最近戦闘続きでオフロに入っていないんだ。
ティファさん、可愛いお口で
ボクのおちんちんをお掃除してほしいな♪」
「こっぴど嫌ッ汚い！ 臭い やめてえ！」

ティファさんの
おロマンコ犯して
あけるからね
愛精込めて
しゃぶってね♪

ガッホッ

ひんやん嫌よ
汚いムクッ

んぶっ！

「おっぱい見えねえぞ
ちやんと見せろ！ 人質の
ガキがどうなってもいいの
がああ？」
神羅兵が怒鳴った。
「くっ下手に反撃したり
あの子の命が！」
ティファは従うしかなかった。

ああ「気持ちいいよ
ティファたん
ホクのロングチンポが
喉奥までじゅがり
届いてるね」

じゅぽ
じゅぽ

男の言うとおり、
深々と喉にささる
イマラチオに
ティファは涙目に
なった。

じゅぽ
じゅぽ

じゅぽ
じゅぽ

んげ
んげ
んげ

（ううっ、く、苦しい
こんな変態男のものを
くわえさせられなんて
嫌っ、嫌よ）





ウツウツ

ジュポ
ジュポ

ジュポ
ジュポ
ジュポ
ジュポ

ちやんと服上げて
おっぱいを見せて

ジュポ
ジュポ

ドクッ ドクッ ドクッ
ほとぼるる精液がティファの
口内にたっぷり注がれた。
ニラッ グラッ
口から溢れた精子は、胸にこぼれ落ち
彼女のエロさを引き立てた。

ドクッ...

ウッ...ハハハッ
ティファたん最高だよ
精子全部でくんじてね
アビビビッ

アッアッ
ふっぐわっ

（嫌ッ！ 苦い...）
臭いよお...あああ
喉奥まで精液で
犯されちゃったよお...



陵辱シヨールは、場所を替え
何度も繰り返された。
ある時はかひ臭い地下の小部屋で
ある時は血生臭く薄暗い実験室で
そして今は寂れた教会で……

小太りの神羅兵がズボンを下ろして横たわった。
その上に、ティファアが強制的に跨らされる。
「ウウッ、嫌っやめて……」
「人質のガキがどうなってもいいのか？ ああっ！」
「……」
従うより他はなかった。

ふぐっ
ラっんん？！

「ヒッヒッ
ティファアちゃん
ほら、もっと腰使って動いて
フヒッフヒッ」
いい眺めだよ

（く……ウッ
クラウドたちが早く……
見つけてくれれば……
でもこんな姿、みんなに見られなく
ない……！）



神羅兵はさらに激しく腰を動かした。
絡み付いていた触手が、ティファの身体を
円を描くように揺さぶりはじめた。
「アアッ! 気持ちいい! その腰づかい
たまんないよ! もっとグリグリ
腰振っていいんだよ! ほらほらっ!」

「ハアハア おまんこの肉ヒダが
チンポに絡み付いて気持ちいいよ
ティファちゃんのおまんこ、揺れるたびに
きゅんきゅん締まって可愛いよ」

（嫌あつ! 酷い...揺らしたくて
揺らしているわけじゃないのに!
ああっ だめっ そんなに揺らされたり...
お奥 おちんぼがおまんこの奥に当たってる
気持ちいいよお 気持ちいいいいい）

いつの間にか、ティファは自ら進んで
腰を振っていた。

ズンズンズン



うっ
うんぐ
ううう
ううう
ううう
ううう
ううう

ガッポッ

ビク

（あああひどい！
子宮の中に知らない男の精液が
たくさん出てるよおお
本当に赤ちゃんできちゃー！）

膣内射精されて、ティファもイッて
しまったことは、傍目にも明らかだった。
「犯されてイクなんて、とんだ淫乱だぜ
ギャハハハハッ」
（う……ク……）
ティファは恥辱を感じながら、
さらに激しくイッた。

ビク

ドイッ

ドイッ
ドイッ…

「ティファちゃん、最高だよー
よかつたよーハハハ
ホクのおよめさんにしたいな〜♪」

薄暗く、生真く、ほりっぽい部屋……。
目隠しをされて連れてこられたのは
どこかの地下室のようだった。

「そこでティファを待っていたのは
さらなる恥辱、それから……強烈な快楽だった。
「グヘヘヘヘ」ここならティファちゃんも
野次馬を気にせず、えっちに没頭できるだろ」

「わっ 私がこんな行為に
没頭したりするわけがないでしょう！」

「ふざけないで！」
強がるティファに触手が絡みつき

「あっという間に足を開かせた。」

「くっ 嫌!! やめなさい!
うっ また腔内に……ネ、ネバネバの触手が

「はっ 入ってくる……ふっああああっ!!」
ティファの秘所は、彼女の言葉に逆らい

触手の侵入に悦びヒクついていた。

「ウッ……いやあ! おっ おまんこっ
やめてえ ああっお尻まで……やめて
やめ……ムゲッ!!」
更に、太い触手がアナルにも侵入した。
「ティファちゃん、そのエロい
クチマンコでしっかりしゃぶってね」



(ううぐっ！) こんなに
膣内 お尻 お口全部
激しくされたら また私
イッちゃうかも……
魔物と神羅兵にイカマレ
る……嫌!! 嫌!! 嫌!!
嫌!! 嫌!! 嫌!!

クニポ
クニポ
クニポ

クニポ
クニポ

クニポ
クニポ

ズン
ズン

ズン
ズン

ウケッ

ウケッ

ウケッ

オウッ



「ウウッ! 出すぞお
ティファちゃんのノドおまんこに
精子注ぎ込むぞあー!!」
「ムゲウウウウウウウウウ
（ひら）やめてええええええ
イクイクイクイク! まだ
いらせやうよあー!」

キュポ
キュポ

グググ
グググ

キュポ

キュポ

ゴウ
ゴウ

キュポ

ズン
ズン

ズン
ズン

フヒッ ティファさんの
オマンコ最高だよ
ギョウギョウ締めて
きてるよお

く……ッ
逃げなまや！逃げなまや！
このままじゃ私
汚されるばかりだわ！
逃げなまや……ッ
しかし手足はビクとも
しないほど、強く拘束
されてる。
どうすればいいの！
このままじゃ私……ッ

ズチュ
ズチュ

パン
パン

パン
パン

アアアア

嫌あアッ



ハアッ種付けしてあげるね
サア、種付けしてあげるね
キテ、種付けしてあげるね
キユフ、種付けしてあげるね
キユウ、種付けしてあげるね
キユウ、種付けしてあげるね
あけるからね!! 射精して孕ませ

パン
パン

ひっやめてえ
膈内はアアアア

本当に
赤ちゃん
でまぢやア
よお!

ズチュ
ズチュ

パン
パン

ブリン
ブリン

（おっ おまんこの奥が
熱く込み上げて爆発しそう!
いいイキイキイキイキ
いいイキイキイキイキ
いいイキイキイキイキ
イカマれちやア! 神羅兵にまた
イカマれちやア! 神羅兵にまた
イカマれちやア! 神羅兵にまた

いっ
いっ
いっ
嫌っ
アアア
アアア
アアア
やめてえええ



「あーっ 膣内はだめええ
もう出さないで!!」
「イクウウだめえっ!!」
「フッ!ウゴッ!...」
「ウウッ!す 凄いやマン」の
ひだひだが絡んで
締め付けてきてるよお」

はっ
アアアッ

お腹の奥に
精子がらああら

ブピュッ

ブピュッ

「ああああっ嫌っ
嫌ああああああっ」
汚らしい男によつて
望んでもない膣奥に
種付けされたティファ
だのに身体を激しく痙攣させ
てイフラは果てた。
反神羅組織のアパランチの彼女が
今や完全に神羅に飼われた
雌豚...あゝいは肉便器であつた。



勝手に陵辱されイカされ、
しつとりと淫らに濡れた身体で横たわるティファに
休む間もなく数名の神羅兵がむしゃぶりついた。

「ビッ なっ 何なのっ!
いっ 嫌あ こんなに大勢
相手にするなんて 無理よっ」

「ケヘヘッ、穴は足りてるだろうが!
オラッ! ケツも犯してやるから足開けよ!」
「じゃ じゃあボクはお口でしゃぶって
もらおうかな フビッ!」

「ふああああっ そんないきなりいっ
ひいっ! ウッ ムゴッ!」

「ううっ! なんて柔らかくて
弾力のすばらしいおっぱいだ!
ムチムチしているじゃないか!」

ある者はティファの膣に挿入し、別の者が
ティファのアナルを犯し、もう一人が
ティファの口内を陵辱していた。

ムチムチとした体中を舐め回され、
悶死するティファ。

（嫌なはずなのに! どうしてっ?
どうして感じちゃうの!）
彼女の頬を悔し涙がこぼれた。

ゴムッ

ぽくっ

プルン

ズッポッ

じゅるっ
じゅるっ

ズルン

オラオラ

ゴムッ...

(ああうっ
おちんぽいいい おちんぽ
気持ちいい!!!
触手より太くて固いおちんぽが
子宮の奥の奥までずんずん
響いてくるううっ)

オラオラ

ツツ

ウウ

ズゴッ

ぽく

プル

じゅる
じゅる

ズ





「ウウッ! ウッ! ……」
「(ああ…おまんことお尻の中の
おちんぼが擦れあっている…!)
内壁がゴリゴリ圧迫されているラ!
気持ちよくてたまらないよおお!
おまんことお尻がとろけあうみたい!」
「へへッ、ティファちゃん、
気持ちが良いすぎて泣いちゃったのかな?」
「そっ、そんなわけないでしょ!」
「ティファちゃん、お口がお留守に
なってるよお」
「ムゲッ!!」
「(くっ、いけない…絶対
私を感じてるなんて、絶対に
悟られるわけには…!)」
ティファがそう強く思えば思うほど
彼女の内壁は敵の侵入に悦び
愛液をしたらたらせるのだった…。

ンゲウッ!

アウッ

ガボッ
アラッ

ズム

ズンッ
ズンッ

ズム

ズム

プルン

ウッ

オオッ

ンゲウッ

ズンッ
ズンッ

